

寢待月

我のみぞねられざりけるかるもかくるまの月の程はへぬれど

〔撮壤集天上〕月 臥待月

〔和爾雅一文〕臥待月又云寢待月

〔八雲御抄三上〕月略 ねまち ふし待廿日月也見

〔藻鹽草天象〕月 ね待の月 十九日 ふし待の月同日

〔倭訓栞前編二十二〕ねまのつき 十七夜を立待、十八夜を居待、十九夜を臥待とも、寢待ともい

ひて、廿日は古來廿日の月とよめり、

〔空穂物語 梅の花笠〕かくて二月廿日になんまで給ける、社中略わかのだいにすべき事、すこしえ

りいで給へとのたまふ、なかよりつかうまつりにくきこと、かならずといひて、かきいだす、あはれけふは春のなかば、月ねまを昨日といひて、はなのにはひをさそふうぐひすのこゑをむかへ、中略冬をいなふる鳥とかきいだして、兵部卿のみこにたてまつる、御覽じてねまの月を、

昨日こそねまちもせしか春のよのこよひの月をいかゞ見るらんどかきて、中つかさのみこにたてまつり給。

〔古今和歌六帖天〕ざふの月

君まつとおきたるわれも有ものをねまの月のかたぶきにけり

〔古今和歌六帖標注〕能因歌枕云、十九日ねまち、宇津保梅の花笠の巻にいふ、二月廿日になんみちて云々、あはれけふは春のなかば、月もねまをきのふといひて云々などみえて、ねまちは十九日なるを、八雲御抄に、ねまふしまち廿日月なり云々、また續古今戀三に坂上是則ねてまちしねまの月のはつかにもあひみしことをいつかわすれんとみゆ、されど此うたは前夜をうけて、廿日の月とよみたれば、ねまちは猶十九日なるべきにや、